SATOYAMA Revitalization

里山創生

神奈川・横浜の挑戦

Edited by Satoru Sadohara, Fumito Koike, Ryohei Kada & Yuichi Sato

佐土原 聡　小池文人　嘉田良平　佐藤裕一　編

里山創生

神奈川・横浜の挑戦

佐土原 聡　小池文人
嘉田 良平　佐藤 裕一　編

創森社

9784883402656
1920061019058

ISBN978-4-88340-265-6
C0061 ¥1905E

定価（本体1905円＋税）

創森社

◆SATOYAMA Revitalization（口絵４色）――――1
大都市圏における生態系の異変　1　荒廃する奥山水源林　2
里山・奥山をめぐる市民運動　3　里山をデザインする　4

プロローグ　なぜ今、里山創生なのか　佐土原 聡　16
えものみち　16
解体から崩壊へ　17
人口減少時代における逆方向のスプロール化　19
自然生態系に着目した「里山の創生」　20
地球環境に対応した知識集約型の国際都市づくり　21
本書の構成　22

第1部　里山の生態系をめぐって～首都圏、神奈川・横浜では今～　25

1章　大都市と生き物の恵み　佐藤 裕一　佐土原 聡――――26
国連「里山・里海評価」と神奈川サイト　26
生き物の恵みに依存する都市　27

生態系サービスと大都市　29
生態系サービスが失われる神奈川・横浜　30
生態系に変化をもたらす要因　31
工業化・都市化と地球の生態系サービス劣化　33
神奈川・横浜で何が起きているのか　34
近代化前期　―産業化の胎動期　36　近代化中期　―産業化の始動期　36
近代化後期　―里山の大規模喪失　36　転換期　―新しい時代の始まり　39
神奈川・横浜における土地利用の現況　39

2章　孤立する里山―横浜　川瀬 博　西高 幸作――――42
里山の変遷　42
生態系と生物多様性の変化　45
高次の捕食性動物の減少　45
種の多様性の低下　46
都市適応種の増加　48
孤立した里山の生態系評価　49
生態系健全度簡易評価法（SEEM）　49
代表的な環境事例を用いた生態系評価の比較　51
質の高い孤立林の生態系評価　53
命のにぎわいにあふれる都市の自然を目指して　54

3章 東京通勤圏の外縁に残る里山 ― 平塚　浜口哲一　小池文人 ― 56

首都圏近郊の里山の歴史　56
市民参加の生き物地図づくり　60
　市街地・丘陵地・水田の生物　60
　土地の歴史と生物多様性　64
里山をどう甦らせるか　65

4章 荒廃する奥山 ― 丹沢 ― 69

❶ 森林利用の歴史と自然環境の荒廃　木平勇吉 ― 69

多様な自然を残す奥山　69
森林利用の歴史をたどる　70
　木材伐採による里山の荒廃（明治・大正期　1920年代以前）　70
　関東地震による山地崩壊と戦時中の伐採（1930年代－1940年代）　71
　燃料革命と人工林造成（1950年代）　71
　高度経済成長と林業隆盛（1960年代）　71
　都市化とレクリエーション利用（1970年代）　71
　林業衰退による森林管理の放棄と生態系攪乱（1980年代）　71
　水源林造成と自然環境保全（1990年代）　72
　市民協働による再生活動（2000年代）　72
なぜ自然環境が荒廃するのか　72
　人工林の管理放棄と土壌流出　72
　シカの過密化と下層植生の消滅　73
　ブナの枯死と困難な後継樹の更新　73
　渓流環境の荒廃と水生生物相の変化　73
　登山施設（ゴミ、トイレ、登山道）の荒廃　73
　外来動植物の侵入と固有の希少動植物の絶滅　73
　地域社会の崩壊　73

❷ シカ管理と森林整備の一体化　山根正伸 ― 74

はじめに　74
シカ過密化の経緯と原因　74
シカ保護管理の転換　77
生態系劣化の拡大とシカ管理の強化　77
おわりに　78

❸ 森林生態系の劣化　田村淳 ― 79

はじめに　79
渓畔林の消失と分断・孤立化　80
ブナ等冷温帯自然林の衰退　81
おわりに　83

5章 都市と自然が出会うところで野生化する外来生物　小池文人　石綿進一　金田正人　齋藤和久　高桑正敏　浜口哲一　葉山久世 ― 84

外来生物のデパート　84
アライグマ　86

タイワンリス（クリハラリス） 90
鳥類 92
昆虫 95
淡水の無脊椎動物 96
外来生物の拡大をどう防ぐのか 100

第2部 社会の変貌と里山への対応～神奈川・横浜の取り組み～ 103

1章 神奈川・横浜の歴史と里山消失 佐藤裕一 佐土原聡 104

第2部のあらまし 104
神奈川・横浜の歴史的経緯と里山の変貌 105
生糸貿易と桑畑の急拡大（近代化前期 1859―1911年） 108
工業化と里海消失、奥山荒廃と水源林取得（近代化中期：前半 1911―1930年） 110
軍都建設による里山の改変（近代化中期：後半 1930―1945年） 111
戦後復興と農地拡大（近代化後期：第1期復興期 1945―1955年） 112
高度経済成長と里山破壊（近代化後期：第2期高度経済成長期 1955―1973年） 113
農業の技術革新と食料の域外依存、林業放棄（近代化後期：第2期高度経済成長期 1955―1973年） 114
追いつめられる都市里山（近代化後期：第3期安定経済成長期 1973―1989年） 115
一極集中・都心回帰と低未利用地の拡大（転換期 1990年～） 117

二次林管理放棄の増大と新たなリスク 118
スキマ拡大という国土管理課題 120

2章 横浜市水源林の歩みと現在 泉桂子 122

道志水源林の誕生 123
森林経営のための計画づくり 124
経営計画の転換点 126
道志村におけるゴルフ場問題 128
新しい関係づくり 129
「道志水源基金」 130
合併浄化槽設置に対する補助金 131
道志水源ボランティアの組織と支援 131
公共事業費の一部負担 132
横浜と道志村の一世紀 132

3章 御谷騒動から古都保存法、そして三大緑地の保全へ 土屋志郎 136

鎌倉市の土地利用と緑の変遷 136
古都の歴史風土と緑 138
古都保存法の意義 140
市民運動の胎動 141
御谷騒動 142
鎌倉風致保存会の発足 144
昭和の鎌倉攻め 146
緑の基本計画 146

三大緑地等の保全と実績 147
市民と行政との協働作業 148

4章 丹沢の自然再生の活動 木平 勇吉 151
自然再生活動の経緯 151
総合調査の実施 151
水源の森林づくり制度 154
丹沢大山保全計画 155
自然環境保全センター 157
ボランティア・ネットワーク 158
シカ保護管理計画の作成 158
県民参加型の調査と計画づくり 160
丹沢の自然再生に向けて 161

5章 神奈川県の新たな水源環境保全施策の展開 其田 茂樹 清水 雅貴 163
水源環境税の成立過程 163
税収による事業とその評価 167
「森林保全」事業 167
「水源保全」事業 168
施策の評価 169

6章 横浜みどりアップ計画（新規・拡充施策）と横浜みどり税 尾仲 富士夫 小田嶋 鉄朗 174
水源環境税の課題と今後の展望 172

緑の減少に歯止めをかける 174
高度成長期から始まった緑の保全と創造 175
高まる緑への市民の期待 177
横浜みどりアップ計画がスタート 178
横浜みどりアップ計画が目指すもの 181
横浜みどり税による安定財源の確保 183
市民推進会議の取り組み 183
生物多様性にもつながるみどりアップ計画 184

第3部 大都市・里山の創生へ～自然生態系の潜在力をもとに～ 185

1章 都市近郊の里山の生物多様性を保全するために 小池 文人 及川 敬貴 186
生物多様性を保全できる景観の設計 187
社会的に実現するには 191
公的なインセンティブ 192
開発の代替地を整備する義務 192
受益者とサービス提供者を直接結ぶ 194
管理の担い手 195
どんな空間パターンがよいのか 196

2章 都市のエコロジカル・ネットワークの空間デザイン 石川 幹子 198
神奈川県における里山保全計画の源流 198

流域圏とエコロジカル・ネットワーク　201
都市環境計画・デザインとエコロジカル・ネットワーク　203
里山環境の残る地域のケース　204
里山環境がほとんど残っていない地域のケース　205

3章　都市近郊里山の役割と創生への課題　嘉田 良平　212

COP10が訴えたこと　212
スキマの拡大と都市近郊里山の役割　213
なぜ「水源環境税」と「横浜みどり税」に注目するのか　214
食の安全・安心をどう作り、誰に届けるのか　217
環境の潜在価値を生かす「自然産業」　219
エコラベル成立のための条件　221
ニューコモンズへの期待　223

4章　縮退する大都市と里山創生　佐土原 聡　佐藤 裕一　227

グローバル経済と地球環境時代の里山　227
地球環境問題における生物多様性喪失とリスクの増大　229
地球環境問題対応策における里山の重要性　231
人口減少時代の到来　232
首都圏の縮退と超少子高齢化　234
荒廃する奥山、丹沢の危機と教訓　236
国際的認知を受けた「里山」問題　237
人口減少と超少子高齢化にどう備えるか　238
生態系サービスを域外に大量依存する大都市の役割　239
求められる新たな国土・生態系管理の仕組み　241
新たな都市里山を目指す―神奈川・横浜の挑戦　242

エピローグ　地域と地球の生物多様性の再生へ　佐土原 聡　嘉田 良平　佐藤 裕一　244

◆Summary（英文要約）　252
◆編者・執筆者プロフィール　255